心肺蘇生法に神様は必要か？

「あっ……あっ……」

　瞬の視界がブラックアウトした直後、今にも消え入りそうで、震えた声が裏路地に響く。光はもう消えていた。倒れた瞬の傍には、ちょっと派手な格好をした、瞬と同じくらいの年頃の女の子が一人と、小さな黒い塊が一つ。黒い塊は、女の子の周りをふわふわと飛んでいた。彼女達は、さっきの黄緑色の光の中から出てきたのだ。

　だが、光から出た直後、女の子は自分の曲げた膝に、何かがぶつかったのを確かに感じた。何にぶつかったのかは、ここに来て、今自身の目の前に写っている光景を見て、彼女ははっきりと理解する。倒れた瞬のみぞおちは、まるで何かがぶつかってしまったかのように、見て分かるほど凹んでいた。それ以外に傷ついた様子は無いが、それが何を意味しているのか、気がつくまでに、そう時間はかからない。

「ころっ……私……人、殺し……」

　ピクリともしなくなった瞬に、女の子は後ずさる。後ろのコンクリートの壁に背中を打ち付けると、そのままズルズルと崩れ落ちた。そんな女の子の様子に、黒い塊も震える。だが、やがて意を決したように、黒い塊は瞬の手首の辺りに近づいていく。

「……もしかしたらと思ったけど、本当に死んでいるみたい」

　黒い塊からそんな声が漏れる。その声も、さっきの女の子と同じように震えていた。

「そ……そんな。神なのに……私、人を……」

「ゼウス様。落ち着いて下さい！」

「あぁ……あぁ……あぁぁぁ！」

　『ゼウス』と呼ばれた女の子は、ワナワナと体も声も震わせる。やがて、ポタリポタリと地面に透明な液体が落ち始めた。

「私……そんなつもりじゃ……殺すつもりなんて……」

「落ち着いて下さいゼウス様！　ゼウス様のせいでは……」

「わっ……私のせいよ……だ、だって、わわ分かったもの……私の膝が、あああの子の……あの子の……」

　しどろもどろにそう呟きながら、ゼウスは自分の、剥き出しになっている膝を掴み、爪を立てる。それでも、目は瞬に釘付けだ。黒い塊も、かける言葉が見つからないようで、瞬とゼウスの間を行ったり来たりしているだけだった。

「あ……あ、そうだ……これなら……」

　暫く震えていたゼウスだったが、やがて何かを思いついたように呟き、四つん這いになりながらも瞬に近づく。女の子は瞬の傍に寄ると、自分の両手の平を瞬の胸に押し付けた。

「……ゼウス様？　何を……？」

　ゼウスが何をしようとしているのか、黒い塊には見当も付かないようだった。だが彼女の雰囲気に、何かを感じたのだろう。

「……おやめください！」

そう叫んで、慌てたようにゼウスの傍に飛んでいく。だが、時既に遅し。黒い光がゼウスと瞬の体を包み込んだ。その光に目が眩んだのか、黒い塊は飛ぶのをやめ、地面にコテンと落ちる。

黒い塊が気が付いた時にはもう、ゼウスの姿はどこにも無かった。慌てて辺りを探しまわるも、ゼウスは見つからない。

黒い塊が途方に暮れた、その時だ。

「……えっ？」

倒れた瞬が、ヨロヨロと起き上がるのを、黒い塊ははっきりと見た。

「つつつ……」

　みぞおちをさすりながら、俺は起き上がる。なんか息苦しい。頭の中がチカチカする。少し記憶が曖昧だが、俺は何を……あぁ、そうだ。そういえば、光の中を覗き込んでいたんだっけ？　よく分からないが、どうやら直後、光の中から何かが俺の体にぶつかって、そのまま気絶してしまったようだ。どれくらい時間が経ったのかは分からないが、時計を見れば、いつもならとっくに家に着いている頃だ。ここに入った以外に寄り道はしていないから、まぁ、気絶していたのは五分くらいってところだろう。

「……なんだったんだ、一体？」

　路地を塞ぐコンクリートの壁には、さっきまであったはずの光りは無い。あれは気のせいとかでは全く無かったと断言できる。あの光はなんだったのだろうか？

「……」

　暫く壁をジーッと見つめていた俺だったが、諦めて壁に背を向ける。コンクリートの壁は、相変わらず灰色のままだった。

「……げっ」

　ぶつかった時に吹っ飛んだのか、遠くに落ちていた自分の鞄を拾い上げると、ちょいと目立つ傷が何本もついていた。念のため中を見ると、筆箱の中のシャーペンが一本折れている。結構気に入っていたやつなので、ショックが大きい。幸いなのは、他の文房具は無事だったことだろうか。教科書も表面がちょっと凹んだり傷がついてしまったくらいで、使うのには支障は無い。弁当箱はちょっと心配だったが、無事なようだ。

　それでも、シャーペンはまた買わないといけないかと肩を落としながら、俺は帰路に戻った。